『いろは文庫』の英訳⑤－「ルーズベルト伝説」の真偽

川瀬健一

日本英学史学会本部例会第 486 回　2014 年 1 月 11 日

問題の設定：

母方の曽祖父齋藤修一郎（1855－1910）が、1880（明治 13）年に為永春水の『いろは文庫』をイギリス人作家・美術商のエドワード・グリー *Edward Greey*（1836－1888）と共同で英訳して出版した『*The loyal ronins; an historical romance*』の影響を論じる。

その影響のよく知られたエピソードとしては、日露戦争当時のアメリカ大統領セオドア・ローズヴェルト *Theodore D. Roosevelt*（1858－1919）が日露講和を斡旋した際に、日本全権代表小村寿太郎（1855－1911）の「閣下は何の動機からかくまで好意を我が日本に傾倒せらるるに至りしや」との問いに対して、齋藤修一郎訳の『四十七浪人』を示して「昔これを一読し、日本人の忠に厚く義に勇むの特性を解し、爾来大いに日本人贔屓になった」と語ったとの逸話である（信夫淳平『明治秘話　二大外交の真相』1928 年萬里閣書房）**【資料１参照】**[1]。

この逸話が真実かどうかを諸史料にあたって検証する。

結論としては、セオドア・ローズヴェルト *Theodore D. Roosevelt* がこの本を読んで日本贔屓になったと日本人に語ったことは事実であり、彼自身の大統領教書でもその旨を述べていることが確認できたが、この話を小村寿太郎にしたという史料は、前記の信夫淳平（1871－1962）の書しかみあたらず、この伝説の真偽を確認することはできないばかりか、この伝説が創作である可能性すら出て来た。

１：出版の経緯とその影響

○1880 年秋　『*The loyal ronins; an historical romance*』第 1 版出版。
　ニューヨークの G. P. Putnam's Sons 社刊

○1880 年 11 月 3 日　ニューヨークタイムズ The New York Times で好意的な詳しい書評 **【資料２参照】**掲載

○1880 年 11 月 10 日付けで、出版を企画したボストンの銀行家ギルバート・アトウッド *Gilbert Attwood*（1825－1881）が、出版を心待ちにした当時ロンドンの駐英全権日本公使

---

[1] この逸話は最初に信夫淳平の本が紹介したが、後に木村毅が『日米文学交流史の研究』（1960　講談社）で再度取り上げ、木村の紹介と考察をもとに外交史家の松村正義が『日露戦争 100 年－新しい発見を求めて』（2003　成文社）で再度論じ、さらにこれらをもとにして民族主義的教員の卜部賢志が『続歴史の「いのち」―公に生きた日本人の面影』（2006 財団法人モラルジー研究所）で取り上げた。このため齋藤は今日ではアメリカ大統領を動かした男として民族主義者の間で広く知られることとなった。

を務めていた森有礼（1847－1889）に『*The loyal ronins; an historical romance*』を送る**【資料３参照】**[2]

〇1882 年　フランスで仏語訳版が出版される

『*Les fideles ronins roman historique japonais*』

パリの A.QUANTIN IMPERIMEUR-EDITEUR 刊　二刷まで刊行。

〇1884 年２月 22 日フランス語版をフランス人の作家で日本美術紹介者であるエドモン・ド・ゴンクール *Edmond Huot de Goncourt*（1822－96）が読んで感銘を受け、著書に殿中刃傷の場面から討ち入りまでの経過を略述し、この浪人たちの主君の仇を討つ話が忠誠の偉大な行動だと二世紀にわたって称賛されたことの不思議さを述べるとともに、フランス語版によりつつ為永春水の描写が真に迫っている様を称賛した（齋藤一郎「ゴンクールのジャポニズム・ゴンクールの『忠臣蔵』」1880 年 10 月東京芸術大学研究紀要）。

〇1884 年　『*The loyal ronins; an historical romance*』第二版出版**【資料４参照】**

ニューヨークの G. P. Putnam's Sons 社刊（２月 18 日にニューヨークタイムズ The New York Times に本の紹介が掲載される）　５刷まで刊行。

２：セオドア・ローズヴェルト *Theodore D. Roosevelt*　と『*The loyal ronins; an historical romance*』の関係

〇ローズヴェルトは二人の日本人に「忠臣蔵」を読んで日本人を知り日本贔屓になったと語っている。

（１）1904（明治 37）年夏　公使館駐在武官竹下勇中佐にたいして【資料５参照】

これは 1940（昭和 15）年 2 月に竹下勇大将（当時）（1870－1949）が外務省の調査官に対して語った回想。1904 年の３月１日から大統領に柔道を教えにホワイトハウスに通う講道館の山下義昭（1865－1935）の通訳を務めた竹下は大統領と懇意になり、事前の予約なしに大統領の執務室に入っていける身となる。その中で夏ごろの会話か。ずっと後の回想なのでどこまで正確かは不明[3]。出版されたのは 2006 年『近代外交回顧録第２巻』（ゆまに書房）として。それまでは外交資料館の資料として収蔵されていた。

---

[2] この献呈の辞については 2013 年秋の英学史学会大会で報告したが、解読に一部あやまりがあることが、法政大学教授スチーブン・ネルソン氏の解読で判明。ここに訂正しておく。

[3] 竹下にローズヴェルトが齋藤訳の「忠臣蔵」を読んだと話した日時は不明。竹下の日記（国会図書館憲政資料室竹下文書）原本の記述にもない。しかも話の内容が昭和 5 年に刊行された『津田梅子』掲載の話に酷似。竹下が昭和 3 年刊の信夫淳平『明治秘話二大外交の真相』と『津田梅子』の二冊を読んで創作した可能性もある。竹下は毎週定期的に海軍省あての報告文書を作って送っている。現在防衛研究所に残っている報告文書に日時を明記したものが発見されないかぎり、この証言の信憑性は確認できない。参考文献『海軍の外交官竹下勇日記』（1998　芙蓉書房出版）。

（２）1907（明治 40）年９月 26 日ホワイトハウスを表敬訪問した津田梅子にたいして【資料６参照】

これは 1930（昭和５）年 2 月に刊行された『津田梅子』（吉川利一　婦人新聞社）に掲載されたエピソード。これも後年のものだが、津田塾大学史料室によると、津田梅子（1864－1929）自身の手紙や出版物や直話をネタにして作られた評伝であるし、出版にあたって原稿はすべて津田梅子自身がチェックしているので史実で間違いないとのこと。

○ローズヴェルト自身が、日露戦争中の日本軍の兵士・将校の勇敢さは、『*The loyal ronins*』にすでに描かれているとその大統領教書で言明している。

（３）1906 年 12 月４日の大統領教書【資料７参照】

ここでははっきりと日本軍の兵士・将校の勇敢さは『*The loyal ronins*』に描かれていると大統領自身が述べているので、セオドア・ローズヴェルトが読んで感銘をうけた「忠臣蔵」「四十七浪人」とは、齋藤修一郎・グリー訳の『*The loyal ronins*』であることが確認できる。

○これらの資料に示されたローズヴェルト発言の性格

１はワシントンの日本公使館に駐在する海軍武官に対する発言。日露戦争開戦後日本軍連戦連勝の時期。駐在武官を通じて、アメリカ大統領は日本贔屓であり、いつでも講和を斡旋するとのメッセージか。竹下は毎週のように見聞きしたことや調査したことを海軍次官宛に報告していた。これをローズヴェルトは意識して間接的に日本政府に伝えようとしたか？（同時期に「政府特派大使」である旧友金子堅太郎が足しげくローズヴェルトのもとを訪ねていたので、彼を通じて直接日本政府にメッセージを送ることは出来ていた）

２は日露戦争後二年を経て満州をめぐってアメリカと日本とが激突し始める時期。サンフランシスコにおける排日の動きも激化し、当時においては日米戦争近しと言われた時。静養を兼ねた欧米漫遊の旅の途中にアメリカに立ち寄った教育家津田梅子が表敬訪問した際に、彼女に話したもの。有名な教育家の口を通じて、アメリカ大統領は日本贔屓だと日本人に知らしめようとしたか？

３は日露戦争終結後１年の大統領教書。アメリカ議会に対するもので、当時はサンフランシスコを中心として日本人排斥運動が激化しており、日本が講和時の国際公約である満州を植民地化せずに自由貿易圏とするとの約束をやぶり、満鉄を独占して満州貿易を独占していると英米から非難され始めた時期。アメリカ人全体に日本に対して冷静な対応を呼びかけると同時に、当然日本の新聞にも転載され、日本人全体にアメリカ大統領は日本贔屓だとの印象を与えようとしたものか？

○ローズヴェルトが『*The loyal ronins*』を読んだ時期はいつか？

金子堅太郎（1853－1942）談によれば、ローズヴェルトは若い時に親友のビゲロー William Sturgis Bigelow（1950－1926）を通じてフェノロサ Ernest Francisco Fenollosa （1853－1908）とも知り合い、彼の著書で日本人の物の考え方に感銘を受けたと（金子堅太郎「日露講和に関し米国に於ける余の活動に就いて」昭和 13 年９月外務省の委嘱を受けた神川博士に対して語ったもの―2006 年『近代外交回顧録第２巻』（ゆまに書房）刊による）金子の問いに対して答えたというので、その後様々な本を読んで日本を研究した中に『*The loyal ronins*』を読んだ可能性もある。ローズヴェルトの若き日の話である。

この話は 1904 年３月中旬の金子の最初の訪問から１・２カ月後にローズヴェルトの家族も交えた会食の中で金子自身がローズヴェルトに対して「初めて会った時君は非常に日本に同情を寄せたが、どういう訳で君は日本に同情を寄せるのだ。何か本でも読んで予備知識があったのか」と問うた事に対する答えであった（前記金子の回想による）。そしてこの答えに続いてローズヴェルトは「日本の武士道について良い本がないか」と金子に尋ねたので金子は、新渡戸稲造の『武士道』を紹介して一冊贈ったとあり、さらにこの本にローズヴェルトが感銘を受けたと聞いて、書店から 30 冊とりよせてに再度送ったとある。

だがこの話は金子が 1928（昭和３）年に日本大学中学校で三回にわたって行った講演では６月７日で金子の問いに対するローズヴェルトの答えとあるが、金子が 1907（明治 40）年 7 月に天皇に対して奉呈した「米国大統領ルーズベルト氏会見始末」（日本外交文書第 37・39 巻別巻日露戦争のＶ巻の６章の第３節講和条約に所収）では、この会話のあった会見の日時は 1904 年３月 28 日の二度目の会見の会食の場で、ローズヴェルトの方から彼が日本を詳しく研究した由来を自ら話し、その中で「フェノロサを招いて日本について講演させて以後各種の著書をひもといて日本に関する表面のことは知ることができたが、日本人の精神観察にまでは至っていない。日本人の性格、精神育成とその原動力を知るべき書籍はないか」と金子に尋ねたとある。そこで金子が贈ったのが新渡戸の『武士道』とイーストレーキの『勇敢なる日本』（ヒロイックジャパン）だと。そして５月 30 日のローズヴェルトの書簡では、彼がこの本を気に入って書店から 30 冊購入して家族や関係者に配布したとの話を確認したとなっている（ｐ708 にこの話は掲載されている）。

金子堅太郎の回想は時機を経る度に内容が変化するところに信用がおけないが、ローズヴェルトが日本に興味を持っていく過程がよくわかる資料ではある。

以上の金子の回想や報告書によれば、ローズヴェルトが若き日にフェノロサの講演に刺激されて読んだ日本についての書籍の一つが『*The loyal ronins*』である可能性があり、これで武士道の精神のありかをしり、さらに詳しく知りたくて日露戦争時に訪米した金子に武士道の参考書を尋ねた可能性もある。一方では、日露戦争時になって初めてこの本を読んだ可能性も又、この本に感激したローズヴェルトが、夏の課題として娘にも読ませたと津田梅子に語っていることから想定もできる。二度読んだのかもしれないが。

残念ながらローズヴェルトが『*The loyal ronins*』を読んだ時期は特定できなかったが、彼がこの書を読んで日本人の精神のありかを知り理解したつもりになったことは確かである。

３：結論―「ルーズベルト伝説」は後世の創作では？

○ローズヴェルトが日本を知る際に『*The loyal ronins*』が大きな役割を果たした

ローズヴェルトが齋藤訳の『*The loyal ronins*』を読み、この物語の中に今日までの日本人の精神的支柱となってきた武士道・忠義の思想があることを理解したことは確実であり、それによって彼が日本を理解したと公言してきたことも確かである。

『*The loyal ronins*』が多くの人々の感銘を与え、日本人というものを理解する有力な資料として受け取られたということは早くは木村毅によって言及されてきたが、これは事実と言えるだろう。

○「ルーズベルト伝説」を確証する史料は見つからない

しかしこの話を小村寿太郎にしたという話は、前記の信夫の本以外には見当たらないので、史実であるとは確定できない。

信夫の前記の本は多くの書籍や原典資料にあたって書いたもので、その旨本の中に注記されている。しかし小村との逸話については出典が全く記されていない。それに練達の外交官である小村がローズヴェルトが日本に加担する意図をわざわざ尋ねるだろうか。ローズヴェルトがアメリカの国益を守るためにそうしていることは周知の事実であった。これは金子がローズヴェルトと行った会談の記録からもわかる。わざわざその日本贔屓の由来を語ったのはローズヴェルトの方だ。

また小村自身は何も書き残していないが、講和会議で始終彼の傍らにあり、後に小村の外交について詳しく語っている（『魂の外交』1941 千倉書房）秘書官本多熊太郎（1874－1948）も、そして小村と緊密に連携して動いた金子堅太郎も、この逸話を紹介していない。さらに小村の親友であり彼が講和会議に出かける前後に文部省第一回貸費留学生の仲間とともに彼とあって歓談した『*The loyal ronins*』の著者齋藤修一郎自身もこの逸話を語っていない。彼が語るのは津田梅子の逸話を新聞で読んだ（「いろは文庫の英訳」1910「日本及び日本人」）というだけである。

「ルーズベルト伝説」を裏付ける客観的資料は今のところ見当たらない。

○「ルーズベルト伝説」は後世の創作ではないのか？≪仮説≫

様々な状況証拠からこの話は信夫淳平（1871－1962）の創作の可能性がある。

信夫は三冊、小村寿太郎伝を書いている。出版順で示すと

１：『明治秘話二大外交の真相』1928（昭和３）年６月刊

２：『小村寿太郎』1942（昭和 17）年 12 月刊　新潮社新伝記叢書

３：『小村外交史』1953（昭和 28）年外務省刊

この三冊のうち、１にのみ、ローズヴェルトが小村に齋藤訳の「忠臣蔵」を読んだと語ったという逸話が掲載されている。実はこの三冊のうち、一番最初に外務省の依頼でその原稿が書かれたのは３である。1922（大正 11）年５月。しかしこれは公表を憚る部分があるとのことで公表されず、そのあとこれを訂正した版も作られたが公刊されなかった。

１は、こうして小村寿太郎伝が公刊されないことに業を煮やした信夫淳平が、いつまでも公刊されないことを本意ではないとして、自家に残された原稿や史料を再構成して、日英同盟と講和条約締結の二つに絞って書き、出版したものとその序言で語っている。２の小村寿太郎伝は、おそらく３の元になった原稿の抜粋縮小版。小村の人物評がある。３は戦後になって外務省が信夫淳平の項本に外交文書などを多数挿入して刊行したものと言われている（『小村外交史』1966 年原書房再刊版のあとがきによる）。

ではなぜこの三冊の中の最初の一冊にのみ「ルーズベルト伝説」が書かれたのか。

これを考察するには小村寿太郎伝が大正 11 年に出来ていたにも関わらず「公表を憚るところがある」として出版されなかった理由の考察が必要である。

いまだこれを実証する史料に出会わないが、信夫が業を煮やして小村寿太郎伝を自ら公刊したのが 1928（昭和３）年であるという時期に注目する。この時期はまさに満州をめぐって日本とアメリカとが戦火を交える日が近いことが予想された時期である。信夫淳平は 1897 年～1917 年まで外交官として活動したあと外交史家・国際法学者となり、太平洋地域の問題を研究する目的で 1925 年に結成され各国の自由主義的知識人が多数参画した太平洋問題調査会のメンバーとなって活動した人物である。日米開戦直後に公刊された２の小村寿太郎伝は、アメリカ大統領が日露講和においていかに日本有利に導いたかをほとんど記述していないが、他の二冊、つまり元々の小村寿太郎伝である３と、その抜粋である２では、ここをとても詳しく記述している。しかし対米対抗を強める政府や軍にとっては、これこそ公表を憚る事項ではないか。こうしていつまでも公刊できない小村寿太郎伝にいら立って書いた１の伝記に、信夫淳平は、「ルーズベルト伝説」を創作して書きくわえてしまったのではないか。

これを推測するにあたって参考になることは、金子堅太郎の回想の変化である。

金子とローズヴェルトとの逸話は、1907（明治 40）年の報告では、ローズヴェルトの方から日本贔屓の由来を語ったとされているが、後年 1928（昭和３）年になって講演で語った際や 1937（昭和 12）年の証言の際には、金子の方からローズヴェルトの日本贔屓の由来を尋ねた形に改作されている。信夫の本は同じく 1928（昭和３）年の刊行だが、これは信夫の示した逸話が、昭和の初めになって作られた話である可能性を示唆している。中国をめぐって日米の激突が間近になったとき、日米協調を説いた人々の創作として。**【資料 8】**

小村との逸話が史実であることは確定できず、むしろ信夫が紹介した「ルーズベルト伝説」は、信夫自身による後世の作り話である可能性を示している。